Chaucer, *The Book of the Duchess* における 'enjambment'

隈 元 貞 広

チョーサーの詩行構成と深くかかわる問題として、韻律、脚韻、そこから生じる様々な統語的現象（文要素の倒置、分離、転置など）があり、これらの問題はこれまで多くの学者によって論じられてきている。[1]しかし、伝統的で、基本的な詩的技法（poetic device）である 'enjambment'（句またがり、行またがり）に焦点が当てられ、チョーサーの詩的言語の全体像へとアプローチしようという試みはこれまでなされていない——周知の基本的な技法であるので、普通に多くの場で一般論的に、また断片的には触れられているが。この詩的技法 'enjambment' は、それが詩行の構成や進行に与える影響を考えると、冒頭で述べたすべての問題とかかわる技法として再考されるべきではないかと思われる。それは、物語詩（narrative poetry）としてのチョーサーの作品の言語、さらには同じく物語詩としての中英語ロマンス作品の言語の本質にかかわる問題であり、中英語物語詩の詩的言語研究への有効な視点となるのではないかと思われる。

この 'enjambment' という詩的技法を B. Ten Brink は、the "separation of even closely connected elements of a sentence by the conclusion of the metrical line" と簡潔に定義し、[2]詩の言語においてこの技法が持っている機能、働きについて次のように言っている： it is indispensable "for the animation of poetical speech and the avoidance of monotony"。[3]さらに Brink は言葉を続けて、チョーサーの 'enjambment' に関して、"No epic poet has availed himself of enjambment with greater felicity than Chaucer, none has by the most varied and yet measured use of this device ... been more successful in producing a combination of movement and repose, variety and uniformity" と言っている。[4]一研究者のコメントとは言え、このようにその使用の卓越性が認められ、指摘されているにもかかわらず、これまでチョーサーの 'enjambment' の網羅的な研究はなされていない。

チョーサーの脚韻研究の権威書として M. Masui, *The Structure of Chaucer's Rime Words* (1964) がある。そしてその中に脚韻との関係からチョーサーの 'enjambment' に27ページがさかれている。[5]知る限りこれがチョーサーの 'enjambment' をいくらか詳しく扱っている唯一のものである。Masui はチョーサーにおけるその詩的技法の重要性に加えて、さらに詩人の初期から後期にかけてのその技法使用の変化およびそこから派生する詩行全体の構造の変化にまで言及しながら次のように述べている：

Enjambment or the so-called run-on line may offer a number of delicate points of Chaucer's verse-structure. ... It serves to enliven the poetical lines and to vary them in tone and cadence. Structurally, it has a close relationship with inversion or transposition in the sentence. In Chaucer with development of his verse-technique from the octosyllabic to the decasyllabic verse there is perceived a growing tendency toward a more natural and sparing use of enjambment. [6]

中英語期に脚韻詩という英詩の伝統を確立、完成させたとも言えるチョーサーの詩行において 'enjambment' という詩的技法が、Brink の言うように、顕著に多様であり、また彼の脚韻詩行の進行や動き（animation）に本質的な役割を果たしているとすれば、その網羅的な研究がなされてしかるべきであろう。それはひいては、ロマンス作品を含む中英語詩全体の詩行構造の解明への重要な手がかりともなるであろう。

確かに、チョーサーの作品を読むと、各行が統語的に完結する次のような詩行（すなわち 'end-stopped line'）にはそれほど頻繁には出会わない：

"Alas!" quod she, "that I was wrought!
And wher my lord, my love, be deed?
Certes, I nil never ete breed,
I make avow to my god here,
But I mowe of my lord here!" BD 90-94

Ful ofte she swouned, and sayed "Alas!"
For sorwe ful nygh wood she was,
Ne she koude no reed but oon;
But doun on knees she sat anoon
And wepte that pittee was to here. BD 103-07

これらの例はチョーサーの *The Book of the Duchess*(BD) からのものであるが、この 2 例のような行の進行は稀で、むしろ、次のように統語的に関係の強い文要素が行をまたがって現れる場合が圧倒的に多い：

"Hit happed that I cam on a day
Into a place ther that I say
Trewly the fayrest companye
Of ladyes that evere man with ye
Had seen togedres in oo place. BD 805-09

ここでは、動詞－副詞句（cam / Into a place）、動詞－目的語（say / the fayrest companye）、その目的語とその形容詞句（companye / Of ladyes）、主語－動詞句（man / Had seen）といった各統語的要素が 5 行にまたがって現れ、各行が途切れず進行していくかのような詩行構造になっている。

次の例も 'enjambment' が目立つ詩行であるが、そこでは上の例とはかなり違った要素によってそれがなされている：

"Syr," quod he, "sith first I kouthe
Have any maner wyt fro youthe,

Or kyndely understondyng
To comprehende in any thyng
What love was, in myn owne wyt,
Dredeles, I have ever yit
Be tributarye and yive rente
To Love, hooly with good entente, BD 759-66

ここでは、助動詞とその動詞（kouthe / Have）、名詞とその形容詞句（understondyng / To comprehende）、動詞とその目的名詞節（comprehende / What love was）、助動詞と本動詞（have / Be）といった要素が5行にまたがって現れている。

チョーサーの詩においてはこの種の詩行がむしろ普通である。このような詩行の動きがチョーサーの詩行の動きで、同種の例はいくらでも挙げることができる。ところが、同時代のロマンス作品を観察すると、この種の多様な 'enjambment' はチョーサーに比べてはるかに控えめで、多くの行が1行あるいは2行で完結しており、その詩行の動きはチョーサーのそれと対照的である。以下に挙げる詩行は14世紀初期のロマンス作品 *Sir Orfeo* からのものである：

When Orfeo herd þat tiding,
Never him nas wers for noþing;
He come wiþ knites tene
To chaumber riȝt bifor e queen,
And biheld and seyd wiþ grete pit :
ÞO lef liif, what is te,
Þat ever ȝete hast ben so stille
And now gredest wonder schille ? Orfeo 97-104

'enjambment' という技法がチョーサーの詩行の構成および動きを決定する重要な要素の一つであることはこのような比較からもわかる通りである。上で挙げた例において見たように、そのようなチョーサーの 'enjambment' を形成している各統語要素の関係は極めて多様である。そしてその多様性こそがチョーサーの詩行特有の調子と動きを形成していることは疑いないことであるが、彼の作品一つを対象にしたとしても、そこで観察されるすべての種類の 'enjambment' を記述するスペースはないので、本論文では、チョーサーの初期の作品 *The Book of the Duchess* (c1369) を例にとり、文要素（S, Aux, V, O, C）による 'enjambment' に限定して焦点を当て、チョーサーにおけるその技法の一端を示したい。[7] 同時代のロマンス作品 *Sir Orfeo*（c1300初期）と *Robert of Cicily*（c1350）（RC）から取っている同技法のデータを簡単な比較の対象として使っている。[8]

The Book of the Duchess における2つの文要素の 'enjambment' としては次のような種類が観察される：

1. The enjambment of S / (Aux) V

2. The enjambment of (Aux) V / S
3. The enjambment of Aux / V
4. The enjambment of Aux / Aux-V
5. The enjambment of V / C
6. The enjambment of C / V
7. The enjambment of V / O
8. The enjambment of O / V

これら2要素による8種類のenjambmentのほかに、

I durste swere, thogh the pope hit songe,
That ther *was* never yet throgh hir tonge
Man ne woman gretly *harmed;* BD 929-31

のように、S, Aux. Vの3つの要素のうちの1つの要素（ここではAux）が、それと統語的に近接して結びつくべき他の2つの要素と行を隔てる場合、あるいは次のようにV, O, Cの3つの要素のOが近接すべき他の2要素と行を隔てて置かれる場合、

Than *found* I *sitte* even upryght
A wonder wel-farynge knyght -- BD 451-2

さらに、次のように、3つの要素が3行にわたって個々に現れている場合もある：

So at the laste, soth to sayne,
I bethoghte me that *Nature*
Ne *formed* never in creature
So moche beaute, trewely,
And bounte, wythoute mercy. BD 1194-98

これらの他に4つの要素が関わる'enjambment'も観察される。これらは、3つあるいはそれ以上の要素による'enjambment'ということで、

9. The enjambment of more than two elements

として扱う。

1. The enjambment of S / (Aux)V

このタイプは、チョーサーのBDにおいては'enjambment'の総数135例のうち59例（43.7%）を占め

る。実際のS/（Aux）Vの現れ方は、Sと（Aux）Vの行中の位置関係によってさらにいくつかのパターンに分けられる。

1.1. 典型的なSと（Aux）Vの 'enjambment' は次のように、Sが行末に来て、（Aux）Vが次行の頭に来る場合である。頻度の点から言うと、このタイプはS/V59例のうち24例（40.7%）を占めている。

S/（Aux）Vで、Sが行末に来て、（Aux）Vが次行の頭に来る24例のうちの16例は次のようにSが名詞の場合である：

That purely tho *myn owne thoght*
Seyde hit were beter serve hir for noght BD 843-4
Than with another to be wel.

Similarly: *hir symple record / Was* founde (BD 934-5), *Narcisus / Nolde* nat love (BD 735-6), *Eneas / Was* fals (BD 733-4), *al the story of Troye / Was* in the glasynge ywroght (BD 326-7), *bothe twoo / Were* slayne (BD 1068-9), *the someres sonne bryght / Ys* fairer (BD 821-2), *the dede slep / Fil* on hir (BD 127-8), etc.

このタイプにおいてSが代名詞の場合があり、それは名詞の場合とはまた違った 'enjambment' の様相を呈している。行末S/行頭（Aux）Vの24例中8例がそのような代名詞の場合となっている：

To tellen shortly, whan that *he*
Was in the see thus in this wise, BD 68-9

Similarly: or elles *she / Had* koude no good (BD 997-8), that *he / Go* faste (BD 139-40), yif that *yee / Wolde* ought discure me (BD 548-9), trewely *she / Was* hir chef patron (BD 909-10), that *ye / Bury* my body (BD 205-6), that *he / Goo* hoodles into ... (BD 1027-8), yif that *she / Had* ... be (BD 971-2), etc.

1.2. 次に、1.1.のような、Sと（Aux）Vそれぞれの要素が行末から次行の行頭へ連続的にまたがる 'enjambment' ではなく、他の要素がSと（Aux）Vの間に——特に最初の行の行末に——入ることによってその連続性が中断される場合である。以下の例でわかるようにこれは1. 1. の場合とは質的に異なり、結果的に異なった詩行の調子と動きを形成している。例としては23例見られ、S/（Aux）V59例の40%を占めている。この 'enjambment' の場合、Sと（Aux）Vの間に入る要素によっていくつかのパターンに分けられる。

a）次のようにSの後に副詞要素が入って行末を占め、Sと（Aux）Vの行末から行頭への連続性が絶たれる場合が最も多い（11例）：

Therwyth *the hunte* wonder faste
Blew a forloyn at the laste. BD 385-6

Similarly: *alle the walles* with colours fyne / *Were* peynted (BD 332-3), *wynter*, thorgh hys colde morwes, / *Had* mad hyt suffre (BD 411-2), *Phyllis* also for Demophoun / *Heng* hirself (BD 728-9), evere *man* with ye / *Had* seen togedres (BD 808-9), etc.

b）Sの後に挿入句や挿入節が入って行末を占め、次行の（Aux）Vへとつながっていく場合もあるが、例としては少ない（3例）：

Hyr throte, as I have now memoyre,
Semed a round tour of yvoyre, BD 945-6

Similarly: *she*, forweped and forwaked, / *Was* wery (BD 126-7), ever *man*, y trowe, / *Had* herd (BD 303-4)

c）同格語句がSの後に来て行末を占める場合も見られる（3例）：

For that tyme *Yowthe*, my maistresse,
Governed me in ydelnesse: BD 797-8

Similarly: *this ylke god*, Morpheus, / *May* wynne of me ... (BD 265-6), *Argus*, the noble countour, / *Sete* to rekene (BD 435-6)

d）関係節がSの後に来て行末を占める場合もしばしば見られる（6例）：

Such sorowe this lady to her tok
That trewly *I*, that made this book,
Had such pittee and such rowthe BD 96-7

Similarly: *This lady*, that was left at hom, / *Hath* wonder (BD 77-8), *Love*, that had wel herd my boone, / *Had* espyed me (BD 835-6), *alle* that hir seyen / *Seyde* (BD 1053-4), *Cesiphus*, that lyeth in helle, / *May* not ... telle (BD 589-90), etc.

1.3. Sは前行の行末に置かれて、副詞要素、挿入要素、あるいは関係節等が次行の頭に来ることで（Aux）Vが行中あるいは行末に来る場合もある（2例）。まず（Aux）Vが行中に来る時次のような'enjambment'になる：

And yet moreover, thogh *alle thoo*
That ever livede *were* now alyve, BD 914-5

(Aux) V が行末に来る場合、その (Aux) V は次のように前行末の S と押韻することになる：

And at myn herte; for-why *hir eyen*
So gladly, I trow, myn herte *seyen* BD 841-2
That purely tho myn owne thoght

1.4. 副詞要素や挿入節が前行の行末と次行の行頭に置かれ、S が行中に、(Aux) V が行中または行末に来る形を取る場合が 1 例見られる：

That *she* ful sone in my thoght,
As helpe me God, so *was ykaught* bd 837-8
So sodenly that I ne tok

1.5. 副詞要素、挿入要素、あるいは関係節等が S と (Aux) V の間に入ることによって 'enjambment' が 3 行あるいはそれ以上の行にまたがる場合がある (4 例)。これは 2 行にまたがる場合とは、詩行の調子や動きの点でかなり異なるものとなっている：

For *both Flora and Zephirus*,
They two that make floures growe,
Had mad her dwellynge ther, I trowe; BD 402-4

6 行にまたがっているという極端な場合が 1 例見られる：

Ne nat skarsly *Macrobeus*
(He that wrot al th' avysyoun
That he mette, kyng Scipioun,
The noble man, the Affrikan --
Suche marvayles fortuned than),
I trowe, *arede* my dremes even. BD 284-9

Similarly: *my lady bryght,* / Which I have loved with al my myght, / *Is* fro me ded and ys agoon (BD 477-9), trewly *Cassandra,* that soo / Bewayled the destruccioun / Of Troye and of Ilyoun, / *Had* never swich sorwe as I thoo (BD 1246-9)

2. The enjambment of (Aux) V / S

それほど頻度は高くないが、(Aux) V / S の並びでの 'enjambment' が 4 例見られる (全例の 3 %) (cf. S / (Aux) V43.7%)。これは1. の S / (Aux) V の語順が入れ代わったケースであり、その下位の

パターンもS/（Aux）Vの場合と類似している。

2.1. 前行末から次行の頭へと（Aux）VとSが連続的にまたがる例が1例見られる：

That I dar swere wel, by the roode.
Of eloquence *was never founde*
So swete a sowmynge facounde, BD 925-6

2.2. S/（Aux）Vの場合と同様、他の要素が（Aux）VとSの間、特に最初の行の（Aux）Vの後の行末に入ることによってその連続性が中断される場合がある（3例)。これはさらに間に入る要素によっていくつかのパターンに分けられる。

a）次のように（Aux）Vの後に副詞要素が入って行末を占め、（Aux）VとSの行末から行頭への連続性が絶たれる場合がある（1例)：

And as I wente, ther *cam* by mee
A whelp, that fauned me as I stood, BD 388-9

b）（Aux）Vの後に挿入節が入り、それが行末を占め、（Aux）VとSが離れる場合がある（1例)：

Such a tempest gan to rise
...
That never *was founde*, as it telles,
Bord ne man, ne nothing elles. BD 73-4

c）副詞要素が次行の頭に来ることで2行目のSが行中あるいは行末に来る場合もある（1例)。BDでは2行目のSが行末に来ている次の1例のみ見られる。そこではその'enjambment'の2行はカプレット（couplet）を形成しない2行であるため、（Aux）VとSは押韻の関係にはない：

And with that word ryght anoon
They gan to strake forth; al *was doon,*
For that tyme, *the hert-huntyng.* BD 1312-3

3. The enjambment of Aux / V

AuxとVによる'enjambment'はBDで26例見られ、当作品における'enjambment'全135例の19.3%を占めている。(cf. S/V43.7%；V/S 3 %）このタイプも、S/（Aux）Vその他のタイプと同様に、AuxとVの2要素の位置関係によって下位パターンに分けられる。しかしそのAuxとVの間に入る他の文要素はS/（Aux）Vその他の場合と必ずしも同じではなく、固有性が認められる。

3.1. 模範的な Aux と V の 'enjambment' は、Aux が行末に来て、V が次行の頭に来る場合と言えるであろうが、しかしこのタイプは稀であり、BD においては 3 例が観察されるだけである。これは Aux / V の全26例中の11.5% になる。これは Aux が脚韻語として用いられるのが困難であるということを考えると当然のことで、以下の 3 例がむしろ特殊な例と言えよう：

Hir eyen semed anoon she *wolde*
Have mercy -- fooles wenden soo -- BD 866-7

Similarly: ful wel I *kan* / *Reherse* hyt (BD 473-4), first I *kouthe* / *Have* any manner wyt (BD 759-60)

3.2. 次に、他の要素が Aux の後の行末に置かれ、次行の頭に来る V との連続性が中断される場合である。連続的な場合とは質的に異なるこのタイプが Aux / V においては主流で、例としては13例見られ、26例中の50% を占めている。Aux の後に来る要素によって、このタイプはさらにいくつかのパターンに分けられる。

a）次のように Aux の後に副詞要素が入って行末を占め、Aux と V の行末から行頭への連続性が絶たれる場合が最も多い（12例）：

Whan I had wrong and she the ryght,
She *wolde* alway so goodly
Foryeve me so debonairly. BD 1283-4

Similarly: I *wol*, be processe of tyme, / *Fonde* to put (BD 1331-2), I *have* ever yit / *Be* tributarye (BD 764-5), thou *shalt* hooly, with al thy wyt, / *Doo* thyn entent (BD 751-2), I *was* as blyve / *Reysed* as fro deth (BD 1277-8), I ne *myghte*, for bote ne bale, / *Slepe* (BD 217-8), etc.

このような Aux ... / V の 'enjambment' には、その構造がほとんど同じ性質を示す例がいくつか見られる。例えば、次のような 'may ... / Slepe' の 'enjambment' 構造が22-3 行目に見られるが、

And I ne *may*, ne nyght ne morwe,
Slepe; and [thus] melancolye BD 22-3

次の 2 行もこれとほとんど同じ構造となっている：

For I ne *myghte*, for bote ne bale,
Slepe or I had red thys tale BD 217-8

次の 2 例も同様に 'enjambment' という技法を軸にした、ほとんど同じ詩行構造を示している例と言えよう：

"I am ryght sory yif I *have* ought
Destroubled yow out of your thought. BD 523-4

Anoon ryght I gan fynde a tale
To hym, to loke wher I *myght* ought
Have more knowynge of hys thought. BD 537-8

このように、'enjambment' という詩的技法は、詩人にとって詩行を構成する上で一種の「型」(mould) としての役割を果たしており、中英語詩の作詩法と深く関わっているように思われる。これは中英語頭韻詩における定型句 (formula) に対応する、中英語脚韻詩への視点として今後考えられるべき問題であると思われる。

b) また、次のように Aux の後に挿入節が入って行末を占め、Aux と V の行末から行頭への連続性が中断される場合があるが、これは S / (Aux) V の場合と違い頻度が低い (1 例のみ):

I *wolde*, as wys God helpe me soo,
Amende hyt, yif I kan or may. BD 550-1

c) 次のように Aux の後に主語が入って行末を占め、Aux-S-V という倒置の形での Aux ... / V の 'enjambment' が 1 例見られる:

For al the world so *hadde* she
Surmounted hem alle of beaute, BD 825-6

3. 3. 副詞要素その他の要素が次行の頭に来ることで V が行中あるいは行末に来る場合もある (1 例)。それは次のような、Aux が前行末に置かれ、V が行中に来る形の 'enjambment' になる:

And sooth to seyn, my chambre *was*
Ful wel *depeynted*, and with glas BD 321-2

3. 4. 副詞要素、挿入節、主語、目的語等の要素が前行末から次行頭に来ることで、Aux と V がともに行中に現れる形での 'enjambment' が 5 例見られる。これは S / (Aux) V の場合には見られないタイプである:

For be ryght siker, I *durste* noght
For al this world *telle* hir my thoght, BD 1149-50

Similarly: *mowe* al ken, / Yf they be crafty, *rekene* (BD 438-9), the hert *had* upon lengthe / So moche

embosed (BD 352-3), clerkes *had* in olde tyme, / And other poetes, *put* in rime (BD 53-4), etc.

3.5. 副詞要素、挿入要素等が Aux と V の間に入ることによって Aux / V の 'enjambment' が 3 行にまたがる場合が 2 例見られる。これは 2 行にまたがる場合とは異なる詩行の調子や動きを形成している：

"I *shal* ryght blythely, so God me save,
Hooly, with al the wit I have,
Here yow as wel as I kan." BD 755-7

Similarly: y *nolde* noght / For al thys world out of my thoght / *Leve* my lady (BD 1109-11)

4. The enjambment of Aux / Aux-V

Aux を 2 つ取る述部の場合に、最初の Aux と 2 番目の Aux が行を隔てて現れる形の 'enjambment' が 2 例見られる（全例の1.5%）（cf. S / V43.7%：V / S 3 %： Aux / V19.3%）：

And thogh they ne hadde, I *wolde* thoo
Have loved best my lady free, BD 1054-5

Similarly: I *wolde* ever, withoute drede, / *Have loved* hir (BD 1073-4)

5. The enjambment of V / C

V と C による 'enjambment' は BD で 5 例と少なく、当作品における全135例のわずか3.7% を占めるにすぎない（cf. S / V43.7%：V / S 3 %：Aux / V19.3%：Aux / Aux-V1.5%)。このタイプの場合、C となるのは、名詞句（3 例）と形容詞（2 例）となっている。このタイプも、他のタイプと同様に、V と C の 2 要素の位置関係によって下位パターンに分けられる。

5.1. V が行末に来て、C が次行の頭に来るという模範的な enjambment は 2 例観察される。しかもそれら 2 例のうちの 1 例は V（この構文の場合、繋合動詞）が 'waxen' の場合、他の 1 例は V が 'ys'、C が *to* 不定詞の場合で、ともに多少特殊な例となっている：

But if myn herte was *ywaxe*
Glad, that is no nede to axe! BD 1275-6

Hir moste worshippe and hir flour *ys*
To lyen, for that ys hyr nature; BD 630-1

通常の 'be' / Adj. (or N) の例はない。これは 'be' 動詞がどの人称変化形の場合も強勢を持つのが困難

であるためと思われる。実際、上の630行の'flour ys'は'flour'と'ys' 2語で、前行（629行目）の'floures'と韻を踏んでおり（いわゆるbroken rhyme)、'ys'は強勢を持たない要素として用いられている。

5.2. 他の要素が繋合動詞（*be*動詞、他）の後の文末に置かれ、次行の頭に来るCとの連続性が中断されるタイプがある。頻度としてはこのタイプがむしろ高く、3例観察される。繋合動詞の後に来る要素によって、このタイプはいくつかのパターンに分けられる。

a）次のように繋合動詞の後に副詞要素が入って行末を占め、行末から行頭へと連続する'enjambment'の構造が変えられる場合が2例見られる：

She wolde have *be*, at the leste,
A chef myrour of al the feste, BD 973-4

Similarly: she *was*, to myn ye / *The soleyn fenix* (BD 981-2)

b）繋合動詞の後に主語と副詞が入っている例が1例見出される：

To love? Nay, certes, than *were* I wel
Wers than was Achitofel, BD 1117-8

6. The enjambment of C / V

頻度は高くないが、5のV/Cの順序が逆になっている'enjambment'が3例見られる（全例の2.2%）（cf.S / V43.7%：V / S 3 %：Aux / V19.3%：Aux / Aux-V1.5%：V / C3.7%)。このタイプの場合Cとなるのは、名詞句（1例）と前置詞句（2例）のみで、形容詞の例はない。明らかに、5で述べたV/Cのタイプの場合とはCの種類において違いがある。このタイプもCとV両要素の位置関係によっていくつかのパターンに分けられる。

6.1. Cが前行の行末に置かれ、Vが次行の頭に来るという基本的なパターンが1例観察される。この場合Cは名詞句となっている：

An ydole of fals portrayture
Ys she, for she wol sone wrien; BD 626-7

6.2. このC/Vの'enjambment'においては、1－5の場合と違い、他の要素がCの後の文末に置かれ、次行の頭に来る繋合動詞との連続性が中断されるパターンは見られない。

6.3. Cは行末の位置を占めたまま、次行の頭に他の要素が置かれ、繋合動詞が行中に位置するパターンが2例ある。2例とも、次行の頭に置かれる他の要素は繋合動詞の主語となっている。そして

Cはともに前置詞句である：

Rounde brestes: and *of good brede*
Hyr hippes *were*: a streight flat bak. BD 956-7

Similarly: *agaynes kynde* / Hyt *were* (BD 16-7)

7. The enjambment of V / O

V / O の enjambment は BD で22例見られ、当作品における全135例の16.3% を占めている（cf. S / V 43.7%：V / S 3 %；Aux / V 19.3%：Aux / Aux-V 1.5%：V / C 3.7%：C / V 2.2%)。このタイプも、他のタイプと同様に、V と C の 2 要素の位置関係によっていくつかのパターンに分けられる。

7.1. BD におけるこのタイプの 'enjambment' で、V が行末に、O が次行の頭に来るというパターンは11例見られ、V / O の全22例の50% を占めている。動詞は一般に強勢を持つため、大いに行末で用いられてこのパターンの 'enjambment' を形成しそうであるが、頻度としてはそれほど高くない。次行頭に来る O は普通名詞要素の場合と *to* 不定詞名詞句の場合がある。

a）次行頭に来る O が普通名詞要素の場合（8 例）：

I kan not now wel *counterfete*
Hir wordes, but this was the grete BD 1241-2

Similarly: I ne *tok / No maner counseyl* (BD 839-40), I have *lorn / My blesse* (BD 685-6), I ... myghte have *do / My wille* (BD 680-1), knowe and *understonde / My woo* (BD 1260-1), cache and *take / Al* (BD 781-2), I may ... *seyn / Worshyp* (BD 1031-2), etc.

b）*to* 不定詞句の場合（3 例）：

For ther was noon of hem that *feyned*
To synge, for ech of hem hym peyned BD 317-8

Similarly: she wolde not *fonde / To holde* no wyght (BD 1020-1), I wolde *fonde / To do* hir knowe (BD 1259-60)

7.2. 他の要素が V の後の行末に置かれ、次行の頭に来る O との連続性が中断されるパターンは 9 例見られ、全22例の40.9% を占めている。このパターンも V の後に来る要素（他の場合と同様副詞要素が最も多い）によって、さらにいくつかの下位パターンに分けられる。

a）次の例のように V の後の行末に副詞要素が入ることで次行の頭に来る C との連続的な

'enjambment' が形を変える場合が最も多い（6例）：

Althogh I koude not *make* so wel
Songes, ne knewe the art al, BD 1160-1

Similarly: they *suffred* thoo / *Oo blysse* (BD 1292-3), Hyt ... *took up* everydel / *Al* (BD 864-5), he that *redde* so / *The kynges metynge* (BD 281-2), he fayle to *rekene* even / *The wonders* (BD 441-2), etc.

b）例としては少ないが、Vの後の行末に入る要素としてはほかに挿入句や挿入節の場合もある（1例）：

And, as me mette, they sate ...
....
And *songe*, everych in hys wyse,
The moste solempne servise BD 301-2

c）前行のVの後の行末に助動詞が入る例が1例見られる。この唯一例においては、次行頭のOは*to*不定詞となっている：

As thogh the erthe *envye* wolde
To be gayer than the heven, BD 406-7

d）前行の要素がV、次行のOが対格目的語というタイプであるので、その後には副詞や挿入句等に加えてさらに与格目的語が入る場合がある（2例）：

My lady *yaf* me al hooly
The noble yifte of hir mercy, BD 1269-70

Similarly: I *told* thee, soth to say, / *My firste song* (BD 1181-2)

7.3. Vは前行の行末に置かれて、副詞要素が次行の頭に来ることでOが行末に来る場合がある（5例）。この場合、行末のOが前行末のVと押韻してcoupletを形成する場合と、そうでない場合がある。

a）前行末のVと次行末のOが押韻する場合（1例）：

This hert rused and *staal away*
Fro alle the houndes *a privy way*. BD 381-2

b）前行末のVと次行末のOがcoupletを形成しない場合（4例）：

"Hit happed that I cam on a day
Into a place ther that I *say*
Trewly *the fayrest companye* BD 806-7

Similarly: have founde to *discryve* / Yn al hir face a *wikked sygne* (BD 916-7), slepe and *mete* / In my slep *som certeyn sweven* (BD 118-9), gan hir hertely *hete* / Ever *to be stedfast and trewe* (BD 1226-7)

このa）とb）の傾向から推測するに、'enjambment' している2要素がともに行末に来る場合、それらを押韻させる、すなわちその 'enjambment' の2行をcoupletにすることは避けられているように思われる。これは、それらの2要素によってその2行を統語的に完結させるよりも、むしろさらに次の行へと詩行の進行を促すためではないかと思われる。必ずしも2要素が行末に来る場合に限らず、'enjambment' している2行をcoupletでなく交錯行にするのはチョーサーに特徴的で、ロマンス作品ではそれとは逆の傾向を強く示している。すなわちロマンス作品においては 'enjambment' している2行はほとんどが押韻するcoupletとなっている。

7.4. Vの後の行末、さらには次行の頭に他の要素が来て、VとOが 'enjambment' となっている例が1例見られる：

I was able to have lerned tho,
And to have *kend* as wel or better,
Paraunter, *other art or letre*; BD 787-8

7.5. 副詞要素など他の要素がVとOの間に入ることによって 'enjambment' が3行にまたがる場合がある（1例）：

For nature wolde nat *suffyse*
To noon erthly creature
Nat longe tyme *to endure* BD 18-20
Withoute slep and be in sorwe.

この例の20行目の 'longe tyme' はすぐ後の *to* 不定詞句に入るべきもので、それが前に転置されたものである。

8. The enjambment of O / V

7のV / Oの順序が逆のO / Vの 'enjambment' が9例見られる（全例の6.7%）（cf. S / V 43.7%；V / S 3 %；Aux / V 19.3%；Aux / Aux-V 1.5%；V / C 3.7%；C / V 2.2%；V / O 16.3%）。正置のV / O

の例が22例であることを考えると、この倒置タイプ'enjambment'は他の倒置タイプに比べて比較的高い頻度を示していると言える。このタイプもOとV両要素の位置関係によっていくつかのパターンに分けられる。

8.1. Oが前行の行末に置かれ、Vが次行の頭に来るというパターンが4例と最も多く見られる。当然この場合2行目の頭の動詞の後に主語が来ることになり、主述の倒置が起こる：

To come to hir. *Another rage*
Had Dydo, the quene eke of Cartage. BD 731-2

Similarly: *swich a fairnesse of a nekke / Had* that swete (BD 939-40), *which a goodly, softe speche / Had* that swete (BD 919-20), *more mesure / Had* never ... creature (BD 881-2)

ここのパターンで挙げられている例はすべてVが'had'であるということに注意すべきであろう。

8.2. 他の要素がOの後の行末に置かれ、次行の頭に来るVとの連続性が中断されるというパターンはこのO/Vのタイプには見られない。

8.3. Oが前行の行末を占め、次行のVの前に他の要素が置かれることで行末から次行頭へのO / Vの連続的な'enjambment'が変えられるというパターンがある（3例)。この場合、2行目のVの前に来るのはその主語であることが多いということは推測できるであろう。3例中2例はその類である。このパターンで、前行末のOと次行のVが押韻している例はない：

Ryght *faire shuldres and body long*
She *had*, and armes, every lyth BD 952-03

Similarly: *al hys halles* / I wol do *peynte* (BD 258-9), *canel-boon*, / As be semynge *had* she noon (BD 943-4)

ここでも、3例中2例において2行目のVは'had'であることに注意すべきであろう。つまり——まだコーパスが小さすぎて事例数が充分でないが——動詞の'had'がO/Vの'enjambment'形成において中心的な役割を果たしていると考えられる。

8.4. Oの後の行末、さらには次行の頭に他の要素が来て、OとVが'enjambment'となっている例が2例見られる。この場合、2例とも、次行の頭に来ているのはVの主語の代名詞である。そしてOは1例が普通名詞句で、他の1例は*to*不定詞句となっている。

a）Oが普通名詞句の場合（1例）：

But *goode folk*, over al other,
She *loved* as man may do hys brother; BD 891-2

このような転置構文は2行にわたるからこそ、すなわち 'enjambment' を利用して初めて可能となるものであろう。このように 'enjambment' の形であるがために可能になっている構文が他にもあるように思われる。

b）O が *to* 不定詞句の場合（1例）：

And never *to false* yow, but I mete,
I *nyl*, as wys God helpe me soo!' BD 1234-5

9. The enjambment of more than two elements

1－8で述べてきた2要素の 'enjambment' のほかに、3つあるいはそれ以上の要素が関わっている 'enjambment' が BD において5例観察される（全例の3.7%）。頻度は高くはないが、中英語詩における、特にチョーサーにおける 'enjambment' の可能性もしくは限界を示すという点で重要である。それらの5例はその構造に従って以下のような3つのタイプに分けられる。

9.1. 3つの要素のうちの1つの要素が、それと統語的に近接して結びつくべき他の2つの要素と行を隔てている、いわば「1 対 2 (one to two)」（もしくは「2 対 1 (two to one)」）タイプの 'enjambment' が3例見られる。そのような「1対2」（「2対1」）の関係を作っている3つの要素の統語構造は2例が知覚構文で、あとの1例が受動文となっている。

a）知覚構文の場合（2例）

次の例では、2行目の 'Men, hors, houndes' は、前行の V 'herde' の目的語であり、さらに前行の 'goynge' 以下は、'Men, hors, houndes' の目的補語で通常なら 'Men, hors, houndes' の後に来るべきものである：

And I *herde goynge* bothe up and doun
Men, hors, houndes, and other thyng; BD 348-9

Similarly: Than *found* I *sitte* even upryght / *A wonder wel-farynge knyght* (BD 451-2)

b）受動文の場合（1例）

次の例では、受動文における助動詞 'was' が単独で前行に置かれ、それの主語と過去分詞動詞がともに次行に置かれている：

I durste swere, thogh the pope hit songe,

That ther *was* never yet throgh hir tonge
Man ne woman gretly *harmed*; BD 930-31

9.2. また、3つの要素が3行にわたって個々に現れている場合が1例ある。以下の例では、S、V、Oの3要素が各行に置かれている：

So at the laste, soth to sayne,
I bethoghte me that *Nature*
Ne *formed* never in creature
So moche beaute, trewely,
And bounte, wythoute mercy. BD 1194-98

このように3つの要素のそれぞれが各行にまたがって現れている 'enjambment' の例はロマンス作品 *Sir Orfeo* に1例見られる。それは次のような知覚構文の例で、V、O、C（目的補語）が3行にわたっている：

He miȝt *se* him bisides,
Oft in hot undertides,
Þe king o fairy wiþ his rout
Com to hunt him al about
Wiþ dim cri and bloweing. Orf 281-5

9.3. さらに、4つの要素が関わる 'enjambment' も1例観察される：

Hit was gret wonder that *Nature*
Myght suffre *any creature*
To have such sorwe and be not ded. BD 468-9

これがBDで見られる唯一の例であるが、ここでは、まず最初の2行の行末から行頭にかけてSと(Aux) Vの 'enjambment'、さらに2行目から3行目にかけてOとそのC（すなわち目的補語）の 'enjambment' となっている。しかもそれらはともに行末から次行の頭にかけてのものであり、'enjambment' の技法としてかなり精巧な造りとなっている。このような 'enjambment' は本論文で調査の対象としているロマンス2作品には見られない。

結 び

チョーサーの詩的技法としてその巧みさが指摘されながらもこれまで中心的に扱われることのなかった 'enjambment' を、初期の作品 *The Book of the Duchess* を対象に観察した。一作品のみという限られたコーパスではあるが、それでもチョーサーにおけるこの技法の頻度の高さ、多様さ、複雑さ

は充分に示されたように思う。

そのような頻度の問題、構造の多様性の問題等は、チョーサーの全作品のデータを対象にした今後の網羅的な研究によってその全体像が明らかにされるであろう。その際、ほぼ同量の同時代のロマンス作品からのデータとの比較がチョーサーのその技法の特殊性をさらに浮き彫りにするであろうことも、本論文におけるロマンス２作品との簡単な比較から推測される。両者には著しい相違が認められる。それは、物語詩の言語としての視点から言うと、素朴で発生的なロマンス作品の詩行構造から、より柔軟で目立たない巧みさを持ったチョーサーの詩行構造へという、当時の詩の言語の発達の一面を示すものであろう。

さらに一つの重要な点は、本文中にも述べたように、'enjambment' という技法を基にしたほとんど同じ詩行構造（品詞や、場合によっては単語まで類似した構造）が多々見られるということである。これは、古英語および中英語における頭韻詩の中心的な研究対象となっている「定型句」(foramula) の問題と対応するような、当時の脚韻詩における一種の「型」と呼ぶべき類の定型詩行の問題として捉えられないかということである。これもコーパスを拡大して、具体的に「型」として捉えられうる構造がどれほどあるのか調べる必要がある。本論文では、わずかな資料ながら、そのような今後の問題の手がかりとしてその一端を示した。

Notes

1. 代表的な著書としては、G. Roscow, *Syntax and Style in Chaucer's Poetry* (Cambridge: D. S. Brewer・Rowman, 1981), N. E. Eliason, *The Language of Chaucer's Poetry* (*Anglistica* Vol. XII) (Copenhagen: Rosenkilde and Bagger, 1972), M. Masui, *The Structure of Chaucer's Rime Words: An Exploration into the Poetic Language of Chaucer* (Tokyo: Kenkyusha, 1964) などがある。
2. B. Ten Brink, *The Language and Metre of Chaucer* (New York: Greenwood Press, 1969), p. 226. 'enjambment' という詩的技法の定義は学者によっていくらか異なるところがある。例えば、Cuddon は 'Running on of the sense beyond the second line of one couplet into the first line of the next' と定義し、couplet の２行目の意味が次の couplet の最初の行へとまたがる場合としている。Cf. J. A. Cuddon, *A Dictionary of Literary Terms*. Revised Edition. (London: Andre Deutsch, 1979), pp. 221-2. この他にも、統語的な要素の行を隔てた問題として定義しているものなどあるが、本論文では、本文の冒頭で引用された Ten Brink の定義が代表しているような一般的な定義に従う。
3. B. Ten Brink (1969), p. 227.
4. B. Ten Brink (1969), p. 227.
5. M. Masui, *The Structure of Chaucer's Rime Words: An Exploration into the Poetic Language of Chaucer* (Tokyo, 1964), pp. 192-218.
6. M. Masui (1964), pp. 192-3.
7. チョーサーのテキストとしては L. D. Benson, *The Riverside Chaucer*. Third Edition (1987) を使用している。
8. *Sir Orfeo* のテキストとしては A. J. Bliss (ed.), *Sir Orfeo* (Oxford, 1966) を、*Robert of Sicily* のテキストとしては W. H. French and C. B. Hale (eds.), *Middle English Metrical Romances*, Vol. II (New York: Russell & Russell, 1964) を使用している。
9. 中英語詩における 'broken rhyme' の使用については、S. Kumamoto, *The Rhyme-Structure of The Romaunt of the Rose-A: In Comparison with Its French Original Le Roman de la Rose*

(Tokyo:Kaibunsha, 1999), pp. 28-9 参照。

The Poetic Device of 'Enjambment' in Chaucer's *The Book of the Duchess*

KUMAMOTO Sadahiro

Abstract

The present paper deals with the poetic device of 'enjambment' found in Chaucer's early work *The Book of the Duchess* (*BD*). The author examines that device in the poet's work, and gives nine types of it: the enjambments of S / (Aux)V, (Aux)V / S, Aux / V, Aux / Aux-V, V / C, C / V, V / O, O / V, and that of more than two elements. The author's analysis shows the variety and complexity of the device in *BD*, and moreover Chaucer's skillful use of the device in that work, by comparing the poet's practice with that in two Middle English romances *Sir Orfeo* and *Robert of Cicily*.

Another point presented in the paper is to suggest the idea of a kind of 'mould' formed by means of the device 'enjambment'. The author suggests that the idea of 'mould', which should correspond to the idea of 'formula' in Old and Middle English alliterative poems, might serve as a viewpoint to explore into the rhymed lines of Chaucer and even of Middle English romance poetry.